

3月28日「十字架への道」マタイ27：32～56

今日からいよいよ受難週に入りました。キリスト教会では伝統的にイエス・キリストが地上で歩まれた最後の1週間を、1日1日に起きた出来事を振り返りながら大切に過ごしてきました。主イエスがエルサレムの人々に棕櫚の葉を振って「ダビデの子ホサナ！」と王として迎えられたこと、神殿がすべての人の祈りの家ではなく、金儲けの場所に成り下がっていることに憤り、商人たちを追い出されたこと、弟子たちを愛し抜かれ、その足を洗われたこと、最後の食事の席でパンと葡萄酒を分かち合われたこと、恐怖と苦しみあまり一人でオリーブ山で祈られたこと、1つ1つに大きな意味があります。その最初の日に当たる今日は棕櫚の主日と呼ばれ、人々がイエスを出迎えたように棕櫚の葉で礼拝堂を飾ります。

そんな今日は、聖書日課から、死刑判決を受けたイエスが十字架へ進んでいかれる物語を聞きました。イエスは最も信頼していた12人の弟子のうちの一人、ユダに銀貨30枚で売られてしまいました。オリーブ山で1人で静かに祈っていたところを、密告され、捕らえられ、裁判にかけられたのです。イエスの裁判はあまりに酷いものでした。イエスが無罪であることは、誰の目にも明らかでした。それなのに、誰もイエスの死刑を止められなかったのです。正しい者が報われ、罪びとが罰せられるはずの裁判の場には正義はなく、祭司長や律法学者たちによる妬みと不正、民衆による狂騒、ローマ総督ピラトによる打算と責任逃れしかありませんでした。その場には「たとえ死んでもイエスに付いていく」と宣言した弟子たちの姿が一人もありませんでした。皆、恐れあまり逃げ出してしまっていたのです。イエスは何の罪もないままに、十字架に付けられることになったのです。

十字架刑が決まったイエスは兵士たちに衣服をはぎ取られ、赤い外套を着せられ、いばらの冠をかぶせられました。兵士たちはその前に跪き「ユダヤ人の王、万歳！」と叫び、葦の棒で何度も叩き続けました。そうやってイエスを侮辱したのです。その後、イエスのご自身が架けられることになる十字架を背負って歩くことになりました。あまりに痛めつけられて、

ボロボロになっていたのでしょう。イエスが一人で担ぐことが出来なかったので、兵士たちはたまたま通りかかったキレネ人のシモンという人に無理やりイエスの十字架を担がせました。このたまたま居合わせた憐れな青年は、後に、その家族と一緒に信仰の道へと入ることになったそうです。神の不思議な導きがあります。

ゴルゴタの丘に着くとイエスは釘で撃たれ、十字架にかけられました。どれほどの痛みと苦しみがイエス様に襲ったか、想像もつきません。しかし、聖書にはただ、あっさりと「**彼らはイエスを十字架につけた(35節)**」と書かれているのみです。イエスの罪状書きには「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれました。通りかかった人々は口々に言いました。「**神の子なら、自分を救ってみろ！そして十字架から降りてこい！**」祭司長たちも言いました。「**他人は救ったのに、自分は救えない。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう！**」そうして、愛する人たちから裏切られ、見捨てられ、妬まれ、蔑まれ、暴力を受け、多くの痛みと苦しみを背負って、イエスは死んでいかれました。「**エリ、エリ、レマ、サバクタニ(わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか!?)**」何の罪もない者が、人を愛し、神に仕えた者が、神に見捨てられた者として、この世界に生まれた者の中で最も悲しい最期の時を迎えられたのです。私たちはこのあまりにも悲しい物語から一体何を聞き取るのでしょうか？

イエスがお受けになった誹謗中傷は本当に酷いものでした。「**神の子なら自分を救ってみろ！そして、十字架から降りてこい！**」ある人はこれはイエスにとって最後の試練、最後の誘惑だったと言っています。それは、イエスが旅に出る前に荒れ野でサタンから受けた誘惑と全く一緒だからです。マタイ4：5～6「**悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。『神の子なら、飛び降りたらどうだ。』**」ここでもし、イエスが神の子であることを示して、さっさと十字架から降りてきたらどうだったのでしょうか？大いなる神の力を自分が助かるために(自分のために)使ってしまうと、それは普通の人間と同じです。もしかしたら、イエスは十字架を降りることが出来たかもしれま

せんが、イエスは神の子としての力を他者のために使うことしませんでした。自分の罪を負って罰せられることを「償い」と言います。そして他者の罪を負うことは「贖い」と言います。イエスは私たちの罪を贖うためにご自身の命を差し出されたのです。「**15:13 友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。**」十字架から降りないことで、イエスは私たちの「友」となってくださったのです。本当の友となってくださったのです。

私たちには他者との間に大きな越えられない壁があります。私たちはどれほど、親しくとも、たとえ家族であっても、他者と痛みや苦しみを共有することが出来ません。

数年前に、ユースキャンプで出会った青年がいました。彼は高校の時に、いじめを見て見ぬ振りが出来なくて、周囲や教師とぶつかり、学校を退学。そのことで両親にも勘当され、これまで独りきりで生きてきました。大きな声では言えない仕事に就いていたこともあると言います。教会でキリスト教に触れて、クリスチャンになったけれども、この先どう生きていくかを迷っている、と言う話を皆の前で打ち明けてくれました。彼はその時、自分の苦しみや悩みを周りの人に分かって欲しいと願いました、けれども、周囲からどう受け止められるかをとても心配していました。また、一方で、簡単に「分かった」と言って欲しくない、自分の苦しみを簡単には理解した気になって欲しくない！と言いました。

私たちには他者との間にどうしても越えられない壁がありました。その人の痛みや苦しみはその人にしか分からないものであり、重いものになると、たとえ似たような経験をしていても、簡単に共感したり「分かるよ」と知ったかぶることが許されないこともあります。ところが聖書は語ります。「ヘブライ書4:15 この大祭司（キリスト）は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」イエスは私たちの本当の友となってくださったのです。

イエスは十字架の上でこう叫ばれます。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」

「我が神、我が神、なぜ私を見捨てたのですか？」このイエスの叫びは詩篇22編の冒頭の言葉です。続きにはこうあります。「22:25 主は貧しい人の苦しみを／決して侮らず、さげすまれません。御顔を隠すことなく／助けを求める叫びを聞いてくださいます。」そう、イエスは蔑まれ、鞭うたれ、辱められ、人間として受ける屈辱すべてをお受けになり、死んで行かれた。だから、イエスは私たちの本当の嘆きを、痛みを、苦しみを理解してくださるのです。イエス様は私たちの痛みや嘆きを「なんて弱い人間だ！それくらい我慢しろ！お前は貧弱な怠け者だ！」そういう風には決して侮られないのです。私たちの痛みに寄り添い、慰め、癒されるのです。讚美歌493 いつくしみふかき「1節 　いつくしみ深い　友なるイエスは　うれしいも罪をも拭い去られる。」

受難週、イエスが負われた苦しみを覚える聖なる1週間を迎えました。私たちはイエスが私たちの本当の友となってくださったことの意味、私たちの痛みも嘆きもすべてを知って受け止めてくださる意味を改めて受け止めたいと思います。ヘブライ書はこう勧めています。「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」このイエスに信頼して、恵みの座へと共に近づく歩みが出来ますように、祈ります。